

## 『平和への願いをこめたようこうざくら陽光桜』



高岡正明さん

とうおん し ひがしたに  
東温市の東谷小学校の校庭には、今から75年前一本の大きな桜の木がありました。

そのころ日本は大きな戦争せんそうをしていて、村の若者は、つぎつぎ戦場せんじょうにかりだされていきました。

その桜の木の下で、青年学校の先生をしていた高岡正明たかおかまさあきさんは、村の若者たちに話しました。「日本は強い国だから戦争に負けることはない。すすんで兵士になって戦ってきなさい。そして、ふたたび、この桜の木の下で会おう」。

しかし、1945（昭和20）年日本は戦争に負けてしまいました。松山や今治や宇和島もアメリカの飛行機ひこうきの爆撃ばくげきで焼け野原になりました。消防団員しょうぼうだんいんでもあった高岡さんは、松山の焼けあとの後片付けあとかたづに行きました。そのむごたらしいようすを見て、「戦争ほどみじめなものはない。もう二度と戦争をしてはならない。」と強くおもいました。

その上、自分が送り出した若者戦争で命を落としたという知らせがつぎつぎと届いてきました。高岡さんは自分を責めました。「わたしの教え子を死なせた」そのようなつらい、苦しい日々が続く中で決意しました。「二度と戦争をしない平和な世界にしなければならぬ。戦争で亡くなった教え子たちのためにも、桜の花を日本中、世界中に咲かせたい。その桜は、寒さや暑さや病気に強く、太陽のように美しいものをつくりたい。」

それから、高岡さんは全国しゅるいに400種類もあるたくさんの桜の苗や種を集め、自分の裏の畑で育てました。そして、接ぎ木つぎ等さまざまな品種改良に取り組みました。そのため、たいへんな費用ひようがかかりました。

息子の高岡照海てるみさんは、子どもころより、ずっと父親の手伝いをしていました。そして、20年が過ぎ、照海さんも大人になり、家を支える立場になっていました。正明さんは相変わらず仕事でかせいだお金を、新しい桜つくりに使っていました。

ある日、照海さんは父に言いました。「こんなことを続けていたら、家も仕事もだめになる。桜はもうやめてくれ。」。すると正明さんは、ふりしぼるような声でいいました。

「頼むからやらせてくれ」目にいっぱい涙をため「教え子のために供養くようをしたいんだ……」。照海さんは、はじめて父親の本当の気持ちをしりました。

1972年、いろいろと研究を続けた結果、ピンク色のカンヒザクラと白色のアマギヨシノの花粉をかけ合わせる事がいちばんいいことがわかりました。そして、苦心の末、21つぶの実がとれたのです。その実を大切に畑にまき、春を待ちました。その実から11つぶが芽を出しました。11本の苗は1974年春、それぞれ花をつけ始めました。その花は、今まで見たこともないような<sup>べにい</sup>紅色の美しい花でした。11本の桜の花の中でもっとも美しい花の枝を<sup>だい</sup>台木に接ぎました。

よく年の春、見事に咲きました。その花を育てて調べると、寒さや暑さにも、病気にも強いことがわかりました。求めている夢のさくらが<sup>たんじょう</sup>誕生しました。

1979年、正明さんは「太陽の光の、世界の平和を呼ぶ花になってほしい。」という願いをこめて「陽光」と命名しました。



美しい花を咲かせた陽光桜

早速、世界平和のシンボルとして、<sup>こうぼうだいし</sup>弘法大師ゆかりの中国西安やローマ<sup>ほうおうちよう</sup>法王庁に苗を送りました。そして、苗を希望する人には無料で送りました。そのようことから、人々は「現代の花咲かじいさん」と呼ぶようになりました。



高岡照海さんと令恵さんご夫妻

そうして、2001年、正明さんは92歳で亡くなるまでに世界や日本各地に送った陽光桜は5万以上になりました。

父が亡くなっても、息子の照海さんは、父の<sup>いひん</sup>遺品を整理する中で、父に送られてきたくさんの手紙を読みました。桜は大きく成長し、美しい花を咲かせてくれます。」「陽光のやさしい色合いが<sup>たましい</sup>魂をなぐさめ、いやしてくれます。」。それらの感謝の手紙に心打たれました。照海さんは<sup>けつ</sup>決意しました。照海さんは決意しました。「父親のあとをついで、死ぬまで陽光を送り続けたい。」。

松山の写真家<sup>わきさかたかゆき</sup>脇坂隆之さんは、ヨーロッパのリトアニアを旅行中、第二次世界大戦のとき、ユダヤ人6000人の命を救った<sup>すぎはらちうね</sup>杉原千畝氏の<sup>はくあい</sup>博愛の心に感心しました。そして、その心をたたえるためにリトアニアに陽光桜などの苗を植えることにしました。それをきっかけに、「日本さくら協

会」をつくりました。その会は毎年、高岡照海さんが育てた陽光桜の苗 3000 本を世界や日本各地に植えるお手伝いをしています。今までにトルコ共和国、チュニジア共和国、カンボジア、メキシコ、インドネシアなど世界 10 数か国に陽光桜を植えました。

このように、正明さんの平和への熱い思いは、照海さんに受けつがれ、年々その輪が広がっています。



トルコ イスタンブール

1890年9月26日、和歌山県串本沖でトルコの軍艦が台風のため沈没、572名が亡くなった。その慰霊のため2005年、日本さくら交流協会が贈った陽光桜。

☆ 文中の「ことばの説明」

青年学校 — 戦争中、16～20歳の青年に主に農業や軍事の訓練をしていた。

- ◎ 参考にさせていただいた本 「桜物語」 大西伝一郎作
- ◎ 参考にさせていただいた新聞  
愛媛新聞 2011年2月～3月10回の連載 「平和への死者陽光」
- ◎ 参考にさせていただいたDVD  
NHK放映 2013年4月 「心を照らす～陽光桜の物語」
- ◎ お世話になった方 高田照海さんと高岡<sup>のりえ</sup>令恵さん御夫妻